



シモマツチの 校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男 前岩手県立花巻北高等学校長

第13回

万葉植物園を妖精のすむ森に

□ 植物園の荒廃と復興の問題から

花巻北高校にはかつて「万葉植物園」という素晴らしい庭園がありました。もちろん、春日大社はじめ、全国に万葉植物園はたくさんあります。花巻北高の万葉植物園も、それに倣って万葉集にちなんだ植物がたくさん植えられていた庭園でした。

しかし、そこは数十年間放置されてきました。その結果、今では草がぼうぼうと生い茂り、池はボウフラの住処になっていきます。万葉植物園の看板はあるものの、今や誰も足を踏み入れることがない場所になっているのです。

そんな中、これまで生徒会を中心に、何人かの生徒たちがこれを復活させようと声をあげてきました。私は、生徒総会で生徒たちが万葉植物園復興の議論を熱く闘わせる姿に驚きました。そして、ああ、こんなにも真剣に考えている生徒たちがいるんだと感動しました。

彼らのそんな思いにもかかわらず、復興が前進しないのはなぜだろう。時間の間

題、資金の問題、マンパワーの問題……いろいろと考えているうちに、私はこの万葉植物園の荒廃と復興の根底には、教育の根幹に関わる大きな問題が潜んでいるのではないかと気づきました。

私はこの万葉植物園を、学校が学校であるかどうかを試すリトマス紙のように感じました。万葉植物園なんて、別に整備しなくても、生徒の学力向上や進路実現や部活動での成果が停滞するわけではありません。むしろ、その整備に費やす時間とお金を、部活や学力向上策のために充てる方がいいだろうという人がいるかもしれません。

しかし私はあえてこう考えます。万葉植物園が忘れられ、放置され、荒廃していった歴史は、学校が学習の効率性を追求めるために無駄をそぎ落とし、文武両道の名のもとに進学実績や部活動の成果をあげることに邁進してきたことの象徴ではないだろうか。

すると、生徒からの復興の声に耳を傾け、行動を共にできるかどうかは、学校の

見識、教育に対するスタンスが問われる、いわば試金石なのではないか。

そこで私は、様々な場で万葉植物園復興を叫んできました。例えば、リノベーションの専門家を招き復興プロジェクトのリーダーたちにアドバイスをいただいたり、保護者や同窓生の方とディスカッションを行ったりしてきました。

私はそのような場で、リーダーたちにこんな話をしました。数字や結果が残せなければ何も残らないというのは「学校」ではない。目標がかなわなくても残るものがあるのが学校だ。だから復興のために立ち上がり、仲間を巻き込んで様々な行動を起こす過程から、多くの宝物を君たちは手にするはず。たとえ復興が道半ばになったとしても、そこで得た経験は社会に出てから生きて働く力になるはず。「踏み出せばその一足が道となる、迷わず行けよ、行けばわかるさ」（なんてね）。

□ 三つのリスペクト

私はそんなことを生徒に言いながら、そ

れはまさに自分に言いかけせる言葉でもあると思っています。私が在任中に、万葉植物園を見て見ぬふりをし、ただ放置していても特に何か問題が起きるわけではないでしょう。せいぜいやぶ蚊が多く発生するだけです。

でも、20年後、30年後はどうでしょう。やぶ蚊は異常発生し、その恐ろしいほどに生い茂る森にいつか雷が落ちるかもしれません。そうなったら、人はそこを厄介な場所として、ブルドーザーで根こそぎ亡きものにしてしまうのです。

私たちに必要なのは過去をリスペクトし、未来の前提である「今」をつくり変えることではないか。そのことを思う力が我々にあるかどうか。万葉植物園復興には三つのリスペクトがあります。一つは、今述べたような過去の先人たちの思いに対して。二つ目は、復興を立ち上げようとする生徒たちに対して。そしてもう一つは「自然」に対して。

話は変わりますが、私の友人にロナさんという方がいます。彼女は高校を卒業して

すぐ「妖精アーティスト」として起業され、今世界中を飛び回っています。担任の先生はロナさんに、なぜ大学に行かないのか、なぜ妖精なのかと問いかけたところ、ロナさんはこう答えたそうです。

「人は古来より自然と共に生きてきた。そこには、『共生とバランス』の世界があった。しかし、人間が便利さを求めていくうちに、自然への関心が薄れていき、妖精、妖怪はファンタジーの世界へ追いやられてしまった。妖精とは、実は自然そのものである。妖精を知ること、自然を知ること。妖精を知ること、自然への畏怖、敬意、感謝を子どもたちに伝え、アートの心や幸せを伝播させる人になりたい」

もちろん、ここで述べている自然とは、自然環境にとどまらないことはいまでもありません。

いわば万葉植物園は妖精がすむ森づくりなのかもしれません。つまり、復興の場所は、その庭園であるとともに、私たちの心の中でもあるのです。